

豊岡偉人伝 17 『最終回』

私たちの暮らしの発展に尽くし、近代日本の礎を築いた人、スポーツ・芸術の普及発展に心血を注いだ人など、豊岡にはさまざまな先人たちの心が息づいています。
その先人たちに学び、志を引き継ぎましょう。

《問合せ》文化振興課 ☎23-1160

妻として母として懸命に生きた りく

りく

- | | |
|-------------|----------------------|
| 寛文9年(1669) | りく、生まれる |
| 延宝2年(1674) | 父毎公、石東家を継ぐ |
| 貞享3年(1686) | この年、大石良雄と結婚か |
| 元禄元年(1688) | 長男松之丞、生まれる |
| 元禄3年(1690) | 長女くう、生まれる |
| 元禄4年(1691) | 次男吉千代、生まれる |
| 元禄12年(1700) | 次女るり、生まれる |
| 元禄14年(1701) | 3月 赤穂事件起きる |
| | 6月 りく親子山科に移る |
| | 12月 松乃丞元服、主税良金と名乗る |
| 元禄15年(1702) | 4月 りくはくうを連れて豊岡へ |
| | 6月 次男吉千代、竹野の寺で僧になる |
| | 7月 三男大三郎、生まれる |
| | 10月 大石、正式にりくを離縁 |
| | 11月 大三郎を久美浜へ養子に |
| | 12月 四十七士、吉良邸に討ち入り |
| 元禄16年(1703) | 2月 大石ら切腹。大三郎、りくの元に帰る |
| 宝永元年(1704) | 長女くう、亡くなる。15歳 |
| 宝永6年(1709) | 次男吉千代(祖鍊)、亡くなる。19歳 |
| 正徳3年(1713) | りくたち、広島へ |
| 元文元年(1736) | りく、広島で亡くなる。68歳 |



りく木像(日下寛治作)

穏やかな日々

大石家は赤穂城の三の丸にあり、建物は300畳以上もの広さで、長屋門や池もある大きな屋敷でした。結婚して間もなく、長男の松之丞、長女くう、二男吉千代が生まれ、子どもの声が聞こえる穏やかな日々が続きました。このころのりくが父毎公にあてた書状に、『くうが習字を習い始めたら、吉千代も書きたいとせがんでいる』また、『夫良雄は無類のそば好きで、新そばが出たら少しでもいいから分けてほしい』などと書かれ、ほほえましい家族の日常をうかがわせます。妻として母として充実した日々を過ごしたに違いありません。

失意の日々

平穏な日々を送っていたりくですが、赤穂事件が起きて藩は取り潰され、やむなくりく 正福寺創建時の寺号額
は子どもを連れ、京都山科、豊岡を転々としします。豊岡に帰るとすぐ、連座を逃れるために吉千代を僧にし、豊岡で生まれた三男大三郎も乳飲み子のうちに養子に出しました。

討ち入りを果たした四十七士は、翌年2月に切腹。夫と長男を失います。翌年、病気で長女くう、次いで、大石家再興を一身に背負っていた次男吉千代(祖鍊)までも亡くしてしまいます。髪をおろし、父が建てた正福寺で冥福を祈る毎日を送っていました。

そして広島へ

赤穂事件から12年を経て、代三郎(大三郎)が赤穂藩と姻戚関係にあった広島藩に仕官するため、りくも豊岡をあとにします。夫良雄の悲願であった大石家再興がかなったのです。るりとの三人の同行には豊岡・広島両藩から百人の行列がついたともいわれています。

再び、平穏な生活に戻ったりく(香林院)は、夫と長男の十三回忌に、豊岡の正福寺に仏具「けいす」を送りました。

広島に移ってからの代三郎の出世や、るりの結婚を見届け、母としての務めを果たした香林院は、広島で68歳の生涯を静かに閉じました。



香林会館に伝わる「けいす」

生い立ち



りくが生まれた邸宅跡

ここできくは成人し、赤穂藩の筆頭家老である大石内蔵助良雄に嫁ぎます。りく18歳、良雄は10歳年上の28歳でした。

りく(理玖・陸)は、豊岡藩の筆頭家老石東家の長女として京町(豊田)で生まれました。京極家が豊岡藩の藩主として丹後田辺(舞鶴)から移ってきた翌年のことでした。